

この二分された生をいかに統一するかに腐心する。(二三五頁)

この一文とともに、早朝あるいは夜遅くに、克己の心をもってご自宅の机に向っていらつしやる先生のお姿がおのずと浮かんでまいります。

先生はまたべつのところでも記されています、「教養人は異業種間の分野で発言ができ、それぞれの話題の領域において、一家言を持っている人をいう」(四頁)。これによれば、二学部・五学科を擁する本学は、本来、学際的な話ができる理想の場たりえるのに、大学全般の置かれた厳しい状況が物理的にも心理的にもそれを困難にしているのは、とても惜しいことに思います。

さいごに——山崎先生とは、たとえ本学でのご縁が無かったとしても、ご著書を拝読しただけでも、ぜひお会いしてご意見を伺ってみたい、話し合ってみたいお人であると思つたことでしょう。そのような先生と実際に三十年という長きに亘つて職場をご一緒できたことは、じつに幸運だったと思つています。

最後になりますが、山崎一穎先生、今日までいろいろご指導くださいまして、ありがとうございます！四月からは茗荷谷キ

ャンパスでお目にかかれますことを楽しみにしております。どうぞ、「一身にして二つの生涯」を御身お大切になさりながらお過ごしくださいますように。

* * *

自由の人文主義者たる山崎さん

文学部人文学科教授 神山伸弘

山崎一穎さんとは、赴任当初から教授会でも飲み屋でもさまざまなお話を語りあつたが、なによりも、学問で真理を探究するその姿勢の真摯さにおおいに感銘と刺激を受けた。

私の専攻分野は哲学・政治学だから、私が森鷗外について書くなどとは、ベルリンに留学(一九九六・九七年)するまで夢にも思わなかつた。それまで、山崎さんが鷗外研究者であることは知つていても、鷗外についてはお話を拝聴させていただくだけにとどまっていたと思う。その学問的な問題意識の真諦をつかむこと

など、門外漢には到底無理である。

いつも飲んでいる仲だから、ベルリンに遊びに来れば『舞姫』にまつわる名所旧跡ご案内申し上げよう、と留学時に提案したのが運の尽きだった。鷗外研究の足しになればと思ったが、体よく断られた。現在のベルリンを見ても意味がない、のさそうである。鷗外が滞在した一八八〇年代のベルリンでなければ、行く意味がない、と……。

それは殺生な話である、タイムマシンなんざありやしない、と最初はこっちも考えたから、そのまま推移したなら、おそらく鷗外は私にとって縁遠い人のままであったろう。しかし、山崎さんは、ある論文をベルリンの私に送りつけ、鷗外論の一大論点としてベルリン空間論というのがあり、最先端のこの論文が超えられるか、と挑発なさった。

「国文学者」たちがあてずっぽうの話をしている現状には、正直、呆れたものである。

山崎さんが一八八〇年代のベルリンの実像をつかみたい、という真摯な立場から、現在のベルリンに行かない、と禁欲されていることが痛いほどよくわかった。ベルリンに足を踏み入れてしまえば、そのリアルな光景に圧倒されて、現前する観光地で得た表

面的な情報で過去に関する学問的な判断をしまいかねないことは、目に見えている。多くの「国文学者」が思い思いにやっているベルリン空間「論」は、実にこの手の類のものである。

しかし、歴史学としてなら、一八八〇年代のベルリンは、資料を探索するオーソドックスな方法で像を結びうる。「分かった。じゃあ、一八八〇年代のベルリンを見せてあげよう」。写真や地図といった直示資料はわんさかあるし、それ以外にも傍証はいくらでもある。このへんは、刑事・探偵よろしくといったところだが、山崎さんにはすっかりはめられてしまった。

これは、行政に関してもいえることだが、山崎さんは人を使うのがうまい。そのつもりもないかもしれないが、山崎さんの求めることは、私が達成したくなる、また、私なら達成できるだろう、と思わせてしまうなかである。教育者たるもの、まさにかくありたし、というべきところではないか。

それに、支配的な通説に対して根柢をもって批判することに共感できる自由な態度や発想を持ちあわせているからこそ、鷗外に関する論考を私に促されたのだろう。「学者」ないし「学者共同体」のかなりは、その本分に反して、真理外的な面子に拘り「私」の情念を維持しようとする傾向をどこかしらに持ちあわせている。



2002年6月16日 三本松城跡(津和野城跡)にて
背景：青野山(神山伸弘撮影)



2002年6月16日 津和野町城跡観光リフトにて
(神山伸弘撮影)

外野からの批判には、権威主義を振りかざしたり、ダンマリを決め込んだりする。もちろん、山崎さんの生き方がこうしたものにまったく無縁であることは、ベルリン空間論を話題にして飲むなかで痛感した。人文主義者たるかな、である。

それはそうと、やはり、山崎さんは、感性的なベルリンをぜひとも一度は拝むべきだと思う。私は、自由の人文主義者に喜んでお供をしたい。